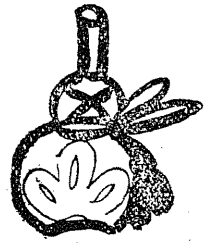

# 何を話すか

……幼児ばなしの選び方について……

上澤謙二

## ☆絶えずぶつかる問題

「何を話すか」

お話をしようとして、まずぶつかる問題はこれである。所謂話材の問題である。「どんなお話をしたらよいか」という問題である。

ところで、幼児教育者は絶えずこの問題にぶつかる。始終幼児にお話をしなければならないからである。しかもそれが「教育」である限り、ひよつこり思いつきの、いいかげんな無責任なお話は許されないからである。

さて「何を話そうか」と思つて、話材をさがすとする。その少なきに苦しむよりはむしろその多きに苦しむだろう。

幼児に対するお話は、むかしむかしの昔話や伝説から始まつて、最近はいろいろ新作が発表され、相次でお話集が出版されている。書架から一冊を取つて、一ページをめくれば直にお話が出てくる。便利であり重宝である。けれども、その「便利重宝」ということが、或る場合には、大に警戒せねばならない危険を伴つているのではないか。

つまり便利だから、ついひよつこり取りあげるということになる。そうして暗誦的に話すということにもなる。

殊に恐ろしいのは、それでも済んでいくことである。幼児はお話について批評をしない。不平もいわないからである。いやでも、つまらなくても、がさがさするか、よそ見をするくらいで、大体そのまま聴くからである。

更に恐ろしいのは、好ましくない感情も、誤まつた思想もそのまま彼等の心にはいつていくことである。そうして或は奥深く印象され、或は根深く刻みつけられることである。そうして知らない間に育つていくことである。

「幼時のお話は一生消えない宝を与える」といわれる反面には「一生消えない禍を与える」こともあるのではないか。

考えれば考えるほど、お話の選び方は大切な——というよりは、真剣な問題といえよう。特に幼児ばなしに於てそうである。

## ☆よいお話わるいお話

けれども、多くの場合、どうも前記の「便利重宝」にたより勝ちになるようである。

パラパラとお話の本をめくつて読んでみる。「これはおもしろい」と思う。「これはためになる」と思う。或は「きれいお話」「詩的なお話」などと思う。それですぐ、「話してみよう」ということになる。

つまりお好みに応じて百貨相並ぶお店へはいつていつて、あれこれと見まわつて、ふと気に入つたものを手にするという行き方である。成程便利重宝この上もない。

しかしこれが大切な考え、真剣な態度を欠いていることは明かであろう。いわばその時々の気分中心気持本位である。

苟くもお話の問題を重大切実に考えるものは、これでよいと安心してはいられない。自分の時々の気分気持以上に客観的なもの原理的なものを求めるのは当然であろう。即ち「お話選択の標準」ということが考えられるようになるのである。

これに対してよく採られる方法は「話してよいお話」「話してわるいお話」というような分類をして、その項目を並べることである。

例えば、よいお話として——親しいもの、明朗なもの、理想を含んだもの、想像に訴えるもの、芸術的な味いのあるもの、知見をひろめるもの等。わるいお話として——あまり恐ろしいもの、悲しいもの、陰欝なもの、残酷なもの、道徳に合はないもの、すぐまねられる悪いことが出てくるものなど。

アメリカのお話の大家マアガレツト・エグレストンは、その著「宗教々育に於けるお話の活用」(宮崎小八郎訳)の中で「話してよいお話」として、左のような種類を掲げている。

神の愛を示す話、自然界の話、家庭生活の話、活路を開く話(小兎が度々窮地に陥りながらそれを切抜けるような)原始時代の信仰や習慣を知らせる民間説話又は神話、一種の疑問を解くホワイ・ストオリー(兎のしつぽはなぜみじかいというような)ユーモアを啓発する話、積極的に教訓する話(善因善果悪因悪果のはつきり出ているような)美を愛する

心を養う話、間接にいろいろな教訓を含む動物の話、聖書の話など。

又「話してわるいお話」としては、感傷的な話、諷刺即ちあてつこすりによつて教訓を与える話、恐怖心を起す話など。

こういうように分類によつて標準を示すことははつきりしているし、包括的でもあるので、妥当でもあり、必要でもあること、いうまでもない。

しかしこういう行き方は屢々述べられているので、ここでは又別な観点から考察してみたい。

## ☆通用できない昔ばなし

時代による道徳観の相違――これは新時代のお話の選択に当たつて、心すべき点であろう。

著るしいその一つは「手柄によつて王女やお話さまをもらつて出世する」という型のお話である。

王さまがふしぎな夢を見るとか、殿様がむずかしい問題にぶつかるとか、強敵に相対するとかして、困つた結果、それを解くか破るかするものには、褒美として王女なりお姫さまなりをやるというおふれを国じゆうに出す。それに応じた或る一人が見事に目的を達し、生きた褒美を自分のものにして、万人の称賛と羨望を博するという――よくある筋である。

しかしこれは人間を褒美という方法に使うものであり、その人の要求や意志を無視して、品物のように他に与えるものである。明かに人格の蹂躙である。これは人格観念の幼稚な時代の産物であつて、人格に絶対の価値を認める現代の思想とは、到底相容れないものである。

著るしいもう一つは「狡智による虚偽が成功する」という型のお話である。

私が幼い時聴いたお話で、今もつてよくおぼえているのにこんなのがある。

「お寺の和尚さんがよそから牡丹餅をもらつたので、小坊主にたべてはならないといつて出かける。けれども小坊主はそつとたべてしまつて、本堂の阿弥陀像の口もとへ餡をぬりつけておく。和尚さんが帰つてくると、阿弥陀さまがたべたという。和尚さんが怒つて像をなぐると、クワンクワン（食わん食わん）と鳴る。『それ、食わないというぞ』と、和尚さんがいうと、小坊主は『それでは釜ゆでにしてみなさい』という。釜へ入れて湯をわかすと煮え立つて、クツタクツタ（食つた食つた）と音がした。それで小坊主はうまくのがれた」

昔は詐欺虚構は智慧のあらわれと見做されて、ほめそやされた。又実際弱者が強者の制圧を逃れる手段としては、こういう方法しかなかつた。しかし現代に於ては智慧は真実のために用いらるべきで、詐欺は罪悪である。又強者弱者も同一の権利を有して、その制圧は正しい方法によつて対抗できる

ようになつた。だからこういう思想は最早や過去のもので、今日には通用できなくなつたのである。

しかもこの両方とも、そうすることが称讃と羨望の的になり、「うまくやつたな」とほめそやされるというに至つては、いよいよ許し難い。それは取りも直さずこのことを支持し奨励する意味になるからである。

こういうお話を無邪気に聴いた幼児に対しては、それは好ましいものだという感情を喚び起し、正しいことだという判断を促すからである。知らず識らずのうちにそれが屢々印象されれば、単に好ましくないところでなく、恐ろしい結果を齎らさないと、誰もが断言できないからである。

この点は重大である割合に、案外等閑にされているのでわなかろうか。

## ☆教育と教訓の取違い

幼児ばなしの種類はいろいろあるが、その基調は「教育的」という点にあることは、いうまでもない。ところが、これがよく「教訓的」とまちがえられる。そうして幼稚園ばなしは教訓ばなしと取りちがえられる。

例えばここにこんなお話がある。

「啓ちゃんはいつも大将になりたいのです。だからお友だちの中へはいると、いばりだします。だからみんな啓ちゃんと遊ばなくなつて、ひとりぼつちになりました。それでつまらなくなつて、オウムのところへやつてくると、オウムは『啓ちゃんの弱虫』といいました。啓ちゃんはじぶんは強いと思つていたので『僕は強いよ、大将になるんだよ』というと、オウムは『むやみにいばつたり、いじめたり、けんかしたりするものは大将になれないよ。えらい大将は、みんなによくしてやつて、困つた時にはおせわをしてやるつて、先生がおつしやつたの忘れたの』といいました。啓ちゃんは『わかつた、僕、あしたからそうする』と答えました。その次の日、啓ちゃんはいばつたり、いじめたり、けんかするのをやめてみんなと仲よくして、よくしてやつて、困つているお友だちのおせわをしてやりました。先生が『啓ちゃん、きょうはえらいね』と、ほめてくださいました。啓ちゃんはうれしくなつて、オウムのところへきて『オウムさん、ありがとう。僕、えらい大将になつた』というと、オウムはいきなりうたいだしました。—わがままをすてて、人々を愛し、日毎のつとめを、なさしめたまえや—」

以上は要約であるが、これは啓ちゃんとオウムのお話でありながら、その気持や活動よりももつと強く感ずるものがある。それはいばつたり、いじめたり、けんかしたりしてはならない」という教訓である。その教訓がお話の基本となり、中心となり、全体となつている。子供と鳥はそれを説明するために借りてきた材料であり、用いられた方法であり、全く教訓のロボットなのである。だから精彩を欠き活力がない。

だから子供と鳥に対して興味も感動も湧かない。従て深い印象も、強い感化も生じないのは当然である。

以前、小学校教育で汎く行われた修身説はこれに属するものである。予め「忠義」とか「孝行」とかいう徳目を定めて、それに合うようないろいろなお話を持つてくる。徳目が主で、お話は従である。だからお話は借物の道具のようで、一向に血も通わなければ生命も躍動しない。修身科が生徒に取つて「つまらないもの」といわれたのは、このために外ならない。

ところが、この行き方がよく取りあげられる。前述のように学校教育の正科にまで取りあげられた——というのは、一定の教訓乃至徳目を持つてくると、目的がはつきりする。従てお話の組立方が簡明になる。その取扱方もやさしくなる。そうして教えるべきことが直接的に教えられるからである。つまり子供にお話するということは、何かきまつたことを教えることだというように思い做されているところからこうなるのだろう。

しかし、お話はけつして一定の教訓、徳目、観念、主義などを教え込まねばならないというようなものではない。そんな窮屈なものではない。否、その反対で、何の条件も束縛もなく、伸びのびと自由に作られ語らるところに特色がある。それがお話本来の世界である。もしも何等かの教訓に合致することがあるとすれば、それは予定の計画でなくて、自然の結果であらねばならぬ。

それはどのお話にも目的はある。しかしそれはお話それ自身のうちに内包された目的であつて、外部から附け加えられたものではない。よしんば作者又は話者が或る理想をもつて、その理想からそのお話が発出したにしても、お話の内容の構成や事件の発展は、飽くまでも有機的必然的で、他の何者からも左右されないそれ自身の世界を持つている筈である。そうしてそれがおのずからその理想と相合い、教訓と相通うものがあるということになるのである。

マウド・リンゼーの著「お母さまのお話」は、ここに引かれるのに恰適なものといえよう。

彼女はフレーベルの「マザー・プレー」に痛く動かされて、そこに含まれた真理を取入れた単純なお話を書こうと思い立つた。けれども彼女はけつしてそれに束縛されなかつた。或は身辺の出来事から、或は幼時の記憶から、或は或るお話の暗示から、自由に取材して、思うままに書きあげた。それがむしろ自然に「マザー・プレー」の含む真理に合致した「お母さまのお話」となつたのである。たいがい各篇のはじめに、そのお話に関連する真理が「お母さまへの標語」として掲げられているが、それはそれぞれのお話におのずから含蓄されている精神を示して、お母さんに一つの示唆を提供するだけのものである。

例えば「どんなつまらないような仂き手でも、他のものが

代ることのできない自分の世界をもつている」という標語がついている「茶色の小馬」というお話の大要はこうである。

「おじさんが小馬に乗つて出かけると、途中で足のかなぐつが取れて、さがしても見つかりません。それで鍛冶屋さんのところへいつて、かなぐつを作つてくださいというと、鍛冶屋さんは石炭がないと作れないといつたので、小馬をそこへ頼んで、石炭を買いにいきました。道で、果物屋さんや、お百姓や、粉屋さんに過つたので聞きましたが、誰も石炭を持つていません。それからおばあさんが来たので聞くと、土の中の坑夫さんのところへいきなさいと教えてくれたので、そこへいつて、やつと買つて、鍛冶屋さんのところへもつてくると、それで火をおこして、かなぐつをつくりました。それで小馬はかけだすことができました。パカパカ、パカパカ」

「教育する」つもりで「教訓する」ようにならないように、「教育ばなし」を選ぶつもりで「教訓ばなし」を取りあげることにならないように——これも心すべき点であろう。

☆

もしも幼児教育が性格教育というところに一つの重点があるとすれば、お話の選択も、そういう立場からなされる必要があるだろう。

従来この方面は殆ど着手されない処女地ともいうべきだが、アメリカのクラーク大学講師ジョン・パートリッヂ博士が夫人との共著に係る「学校及家庭に於けるお話」の中に、これに関する適切な指示とも有力な指導ともいうべき言説が見出だされる。ここにその幾つかを抜萃しよう。

「お話は児童の個性の要求に答えられるだろう。感情生活の根抵を強く打つお話が、個人の傾向を支配する上に、有力な仂きをすることはたしかと思われる。その仂きとは、好ましい特性を伸ばし、好ましくない特性を矯めることである」

「もしそういう仕事がまじめに取りあげられるならば、児童とお話との二つの方面に対する綿密な分析が必要とされるだろう」

「感情的欠陥は、大体満たされない欲望の暗躍から生まれる。個性の陶冶に資する理想的なお話には、こういう気質的な欠陥に対する入念な分析が取入れられねばならない。そしてこれには、実際教育者が普通に行なう以上に深い方法——即ちお話が、児童の潜在的衝動に及ぼす一々の効果を発見するために、お話の根本に対する洞察的な研究が要せられるだろう」

「我等はそういう研究の完成を待つてばいられない。児童の文学並児童を研究しようとするものは、たとえそれほど広く又深くないにしても、専門家と同じ立場に於て、或る程度の、或る種類の域に達している。個性の強い要求は重要な目立つもので、容易く捉え得るものであり、従てこれに対応する或る種のお話の目的と効果は、殆ど誤ることのないほど明

瞭なものである」

「いろいろなお話を知つている親や教育者は、それを通して、或る程度の指導をすることができるにちがいない」

「お話と個人の関係が応用心理学のむずかしい部分だという事実によつて、驚き又惑うには及ばない。問題の多くは表面に横たわつている。そうして児童に対する単純な常識と熱心な興味が有効に用いられるように、門は開かれていろのである」

実際この処女地を開拓するのは大事業である、まずお話が汎く蒐集されなければならない。そうしてその一々が、児童の精神生活のどういう方面にどんな感化を及ぼすか、どんな効果を齎らすかということが究明され、更にそれが年齢に応じ、性格に応じ、環境に応じて、類別され、排列されねばならないだろう。

しかし我等はこの問題に向かつて出来るだけをなすべきだろう。それはパートリッヂ博士がいうように「そういう研究の完成は待つていられない」からであり、又「或る程度の指導ができるにちがいない」というその言に励まされるからである。

けれどもこれは今まで全然ほうりつぱなしにされていたというのでもない。子女の教育に熱意を有し責任を感じ、お話に興味と注意を持つ親や教育者は、むしろ我知らず、既に自然にこの方面に鍬を入れたのである。

例えば陰気な子供には明るいお話を、むやみにはしやぎまわれる子供にはおちついたお話を、寝る時にはしずかな平和なお話をというように、極めて常識的であり、単純に経験的であるが、おのずから定まつているようなところがあるのは、即ちわずかでも鍬を入れたわけである。

## ☆多血質の子供とお話

そこで、我等は及ぶ限りに於て、多少とも前進を試みてみたい。

従来性格を形成する気質の類型としては、多血質、胆汁質、粘液質、神経質の四つが数えられた。近時心理学生理学の発達と共に、新しい分類法も提出されたが、ここでは一般にいはれるこの類型に従つて、お話との関連を考察することにしよう。

第一に多血質である。この気質は、快活、開放的、社交的、楽観的などを長所として具え、おちつきがない、飽きつぽい、動かされ易い、上すべりなどを短所として有する。

こういう子供は所謂人なつこいので、至るところで歓迎されるため「ませた子供」になり、目先はきくが薄つぺらになり易い。その「人なつこさ」を深化し高化して、愛敬の方向に導びくことが大切だろう。木の上の巣の中に於ける鳩の親子の楽しい生活を描いて、その間おのずから相互愛敬の交流をあらわしたリンゼーの「早い翼と美しい声」や、お母さん

にお使やお手伝の代金を請求して、あべこべにお母さんからいろいろなことをして何も請求しないお手紙をもらつて、その無限の愛がわかつた、カールの「ブラットレーがもらつたもの」など。それから、三びきの姉妹の蝶が、雨に合つておたがいに助け合う、ドイツの民話の「三びきの蝶の姉妹」や、お菓子の爭から弟をなぐつて、弟とお菓子とどつちが大切かと、通りがかりのおじいさんに聞かれて気がついた、リカーズの「お菓子」など。前二篇は父母に対する愛敬の情を後の二篇は兄弟愛を進めるのに役立つと思われる。

一体に幼児は他に動かされ易く、反面好奇心が強いので、よく軽卒な行動をするが、多血質なものは殊にそうである。それには軽卒なために失敗したお話は、まざまざとその結果を見せつけて、一種の予防ともなり、反省を促がす動機ともなろう。又反対に守るべきことをよく守つて、そのために喜ばしい結果を得たお話は、おのずからそれと自分との比較を喚び起し、新しく進む手がかり又は基礎を与えることになろう。親牛のいうことをきかないで、うつかり遠くまで遊びに出かけ、泥沼へ落込んで、やつと助かつた、ブライアントの「仔牛のブル」は前者に属し、お母さんとの約束通り、五時が鳴つたらかえつてきて、おいしいものをいただくことができた、ルーセットの「時計」は後者に応ずるものである。

上すべりは裏からいえば、注意が足らないことを意味するので、それを喚起するようなもの。友だちといつしよに散歩から帰つてきて、どんなことがあつたかと聞かれためくらの子供が、他のものよりはより確かに細かく答える、カロリン・ベーレーの「小さなめくらの子供」や、猫がいろいろに考案工夫して、とうとう台所にあるビンの中のミルクを飲んだ、ボンナーの「ビツドルのもう一つのお話」などが、これに適うだろう。

## ☆膽汁質の子供とお話

第二は胆汁質である。この気質は、決断的、実行的、集中する、しつかりしているなどを長所として見え、強情、傲慢わがまま、同情が乏しいなどを短所として有する。

果断と実行力が自分のためにのみ使わると、自我的になり、利己的にする。それは人間固有の傾向ともいうべきだから、他のため人のために用いるように導びく必要がある。木の上の巣の中にいる傷ついた駒鳥を喜こばそうとして、苦心して木を伝わつて上まで伸びていつた朝顔が、遂に目的を達して、自分も大きな喜びを得る、エリザベス・マクラッケンの「なぜ朝顔は上へ伸びたか」や、暑さにあえぐ農夫を見た雲が、自分をなくして雨になつて天上からおりてきて助ける、ロベルト・ライニックの「雲」などは、この要求を満たすだろう。

強情は反感の強いところから起り、傲慢は盛んな誇示本能から生ずるが、幼児の中にも、よくこういう傾向をもつもの

があり、こういう場合に陥ることがある。ひとりで伸びようと強情を張つたつるバラが泥にまみれて、その無益なことを悟り、風に助けられる、ガツラーの「ひとりで昇ろう」や、五ひきの水棲動物が逃げる方法についてそれぞれ自慢し合うが、謙遜で用心深いドジョウの説明に、みんな口をつぐんで恥じ入る、ウエーデの「水の仲間の会」などが、これに対応するものとして挙げられよう。

反感やわがままは感謝の心のないところに萠す。この感情を養うことは、人生を明るくする一つの胚種を植えつけることである。じりじり照りつける太陽に不平をいつた花が、雨、雲、風への感謝を通じて、結局太陽に感謝することになる、ライマン・アボットの「花の感謝」や、片目、片足、片羽で生まれて、いうことをきかない子供の鶏が、遊びに出て子供や犬に追われ、初めて親に対する感謝が湧いて、両目、両足、両羽になる、スペインの伝説に取材した「小さい半分にわとり」などは、ここに利用されるだろう。

## ☆粘液質の子供とお話

第三は粘液質である。この気質は、沈着、入念、考え深い。粘り強いなどを長所として具え、冷淡、緩慢、無精、鈍感などを短所として有する。

冷淡や鈍感などは、他人との交渉に対する興味を刺戟することによつて、仂き出すいとぐちを与えられるだろう。それには、兄弟姉妹総がかりで、おばあさんの大すきなお菓子を作つて、誕生日の贈物にして喜ばれる、リンゼーの「誕生日のおくりもの」や、縫物をするおばあさんのそばにいて、針の孔に糸を通してやつたり、ころがりおちた糸玉を取つてやつたり、喜んでいろいろ手伝う、カロリン・ベーレーの「おばあさまのめがね」などは、好適と思われる。

仂らくことをよろこぶ積極的態度を養うことも、こういう子供には極めて必要だが、お庭をはいている子供の指へ、十人の仂らくこびとがはいりこんで、その仕事を愉快なものにする、ウエルチの「チヤーロットと十人のこびと」や、どんな御馳走もおいしくなくなつた王子が、或る子供の薪わりを手伝つて、その粗末なお弁当を分けてもらつて舌つづみを打つ、ベーレーの「おなかがすかなかつた王子」などは、ふさわしいと思われる。

幼児は「当てもの」とか、謎とかを好むが、そこには「何だろう」という好奇心が仂き出し「いい当てよう」という努力が発してくるので、この問題的興味を応用したお話は、自発的な心的活動の機会を与えるものとして、粘液質の子供に話すのによい。おばあさんが持つてきたおみやげを子供たちに当てさせる、リンゼーの「三つの当てもの」や、木へひつかかつたゴム風船を見てびつくりした小鳥たちが、何だろうとおたがいにいろいろ考える、拙作「赤いゴムふうせん」などは、この場合に当てはまると思われる。

## ☆神經質の子供とお話

第四は神経質である。この気質は、頭がはたらく、気がきく、順応性が早い、表現力が豊かなどを長所として見え、飽きつぽい、臆病、物事を気にする、口達者の割に実行力が伴わないなどを短所として有している。

こういう子供にはゆつたりした朗かな気分を味わせるのがよい。それは万事を気に病むこせこせした状態を緩和するか解放するかする。その最も著るしいものは笑である。これをお話の世界に移せば、滑稽ばなし又は無意義ばなしとなる。但しその笑は、飽くまでも自然で無邪気でなければならぬ。それで初めて「精神的解放」になるのである。大袈裟な作為と、無理なくすぐりとは、反対に飽満と疲労を齎らす。現在の所謂「笑いばなし」に実にこの種のものが多いことは警戒しなければならない。

机と椅子が散歩に出て、いろいろな失策をして笑の種を蒔く、エドヤード・レーヤの「机と椅子の散歩」や、大きな一つの話に、家じゆうの人が出て、総がかりでやつと抜く、北欧の民話「蕪ぬき」などは、この種の見本といつてよかろう。

飽きつぽいのに対して、忍耐持久の心を養うのに資するお話としては、ヨーロッパの民話「どうして鳥たちの巣はちがうか」や、フランシス・ベーレーの「百合は何が入用だつたか」などが示されよう。前者はカササギが巣を作るのを、いろいろな鳥が見ていたが、他のものは途中でいつてしまつたのに、椋鳥はおしまいまで見て、完全な作り方をおぼえたというお話、後者は女の子がきたない球根からきれいな百合の花を咲かせるまでの忍耐を描いたお話である。

むやみにこわがることも、神経質の子供の特徴だが、風をこわがる子供には、風がいろいろ面白いしわざをして、子供と親しむところを取扱つた、リンゼーの「ふざける風」や、夜をこわがる子供には、夜の美しさと楽しみを子供が味わうところを描いた、ランキンの「夜がくるのを見守つた子供」や、見馴れない動物をこわがる子供には、こわくてたまらなかつた大きな牛に無理に乗せられたこびとが、意外な親しみと喜びとを見出だして仲よしになつた、ファイルマンの「小人と牛」などが、それを緩和するのに役立つだろう。

臆病や実行力の欠乏に対しては、元気をつけること、意志を強めることが必要だが、鳥小屋のみんなが雪ふりの寒さに閉口している時、七面鳥がみんなに元気をつける、フオックスの「その最上をすること」や、兵隊さんがその中にいるという太鼓を買つてもらつた子供が、それに力づいて、太鼓をたたいてお友達のけんかを鎮め、大きな馬のそばを恐れずに通り、暗くなつても泣かないで家へかえる、ベーレーの「太鼓の中にいる兵隊さん」など、これに該当するものといえよう。

ちよつとしたことにもすぐ泣き出す所謂泣虫も、神経質の

子供によく見られるが、泣虫の小兎が、泣きものばかりいる大泣きの森へはいりこんで、おどろいて逃げてかえるという、ブライアントの「泣きうさぎ」は、泣くということの無益有害さを覿面にあらわしているので、その矯正に資するところがあると思われる。

## ☆最適のお話はただ一つ

幼児教育者としては、お話を選ぶと同時に、お話する時機、場合を選ぶということが、極めて重要重大である。折角よいお話が選ばれても、それを話す時機が不適当だと、価値は或は半減されるだろう、或は全然発揮されないだろう。

その極端な場合をいえば、表には雪がふつているのに、桜の花のお話をするというようなことである。まさかこんなことはあるまいが、幼稚園では一年じゆう毎日子供と接触しているのだから、適当な時機と場合はいつでも見出だされるわけであり、見出だされねばならぬわけである。

適当な場合が選ばれて、適当なお話が話されれば、その価値は倍加され、その効果は累加されるだろう。前例につづいていえば、表に雪がふつている時雪のお話をし、桜が咲いている時桜の花のお話をするというわけである。

これは環境の関係ばかりではない。子供の心持との関係も考慮されねばならない。彼等は今、何を要求しているか、何が問題になつているか、何に興味をもつているか、それに即して、お話が選ばれ、なされねばならない。

よきお話を選び、適当な環境を選び、適切な心理を選んで、材料と応用と、内と外と、相合い、相応するところに、「何を話すか」という命題に対する理想的な解答が与えられるであろう。

しかも、いかなる場合にも「最適」はただ一つしかない。世に行われるお話はかぞえきれないが、それぞれの場合に於ける「最適なお話」は「ただ一つ」しかない筈である。この「唯一最適」を発見することこそ、その時々に課せられる話手への重大な責任であり、光栄ある任務であらねばならぬ。

〔附言〕

本稿に引用したお話は、いずれも、拙著「新幼児ばなし三百六十五目」六冊（恒星社厚生閣出版）の中にあります。


**「幼児の教育」を求む**

本学図書館において「幼児の教育」ブック・ナンバーを揃えたいと思いますので御協力ねがいます

一、巻号名　第一巻より第四巻までの各号

一、買求価格　一冊三〇円、お譲り下さる巻号名を予じめ御通知下さい

東京都中野区宮前町四六　宝仙短期大學

電話中野（38）三五一一番